

経塚 碑文 上段：原文

勢州多気逢鹿郷正南相去五百歩ばかり許

有山曰経塚 塚つか上有老松蒼幹龍髯佛

雲擎天近觀遠望宛如張蓋土人呼曰経

冢松けん権興寥々無知其来由者誠可憾矣

郷人鶴林庵医伯書写みようぎよう妙経每一石一

字都来六萬九千三百八十餘言すべて筆辛

酉九月壬戌六月功成乃供養法施埋之

経塚且將樹碑勒銘伝於不朽属余以記

其緯余合掌随喜告曰衆経中王最為第

一諸佛全身堅固舍利降靈本致秘要おう奥

藏皆於此経宣示けんぜつ顯說故吾 能仁世尊のうにんせそん

自唱曰諸佛於此得三菩提さんぼだい轉於法輪入

下段：現代語訳

() 内は注釈、〔 〕内は補足

伊勢国多気相可の里の真南、五百歩ほど離れたところに

経塚という山がある。塚の上に一本の老松があり、長い年月を経た幹は龍を思い起こさせる。

雲を突き破り、天が近く見え、はるか遠くを見渡すかのよう、あたかも天蓋てんがい(仏像などの上にかざす傘上の装飾物)のようにみえ、地元の人は経塚松と呼ぶ。

事の起こりははっきりとしない。その由来を知る者がいないのはほんとうに残念なことだ。この里の人ですぐれた医師の鶴林庵(佐田林庵)はありがたいお経を一つの石に一字ずつ書き写した。全部で六万九千三百八十余りに及ぶとい

う。書き始めたのは辛酉九月で、壬戌六月にこの立派な行いを成し遂げた。そうして供養し、これを埋めた。経塚ま

さに碑をたて、その来歴、記録を刻み、永く後世に伝えようとした。そこで私はその事柄を記す。私は手を合わせて祈り、ありがたく思い、多くの人々に告げて次のように言

った。「法華経は」さまざまな經典のなかで最も重要、諸経の王である。諸仏は全身、堅固な舍利(釈迦の遺骨)であり、

降靈(仏の位ではない諸天善神等のこと)の本致であり、秘要奥藏(奥に秘められた最も重要な事柄)である。すべてこの経に明らかな形で説かれ、示されている。それゆえ、お

釈迦さま(能仁世尊は釈迦の尊称)自らが唱えていることには、諸仏はここにおいて三菩提(悟り)を得て、教えを説き、

般涅槃はつねはん般若田宅園林若樹下石上留止之

処神物衛護矣医伯姓佐田名道俟字致

恭自号正山隱士又号栽松堂培之其淳

厚誠実郷人所知也余乃作銘曰

岌々南山民具瞻之ぐせん雲瑞光応妙典鎮斯

塵劫不朽じんこつ福利無涯経塚嘉名名実獲時

維時これとき寛保二年歳次壬戌夏六月

伝天台宗教沙門獅子吼堂主人妙空慧海叟和南誌

宝暦十年庚辰秋八月

勢州洞津国臣森其章琢卿父拝書

〈参考〉この経塚と直接関係があるかは不明であるが、林庵が経を石に

書き始めたのは寛保元年九月、同年七月には「寛保の洪水」と

いわれる大洪水で宮川堤が決壊、伊勢神宮周辺で甚大な被害が

発生しており、相可のあたりも大きな被害があった可能性が高

い。苦しむ人々の救済を願って作られた経塚とも考えられる。

悟りに導き、私は般涅槃(完全な悟り)に入る。田や家、庭園

や林のように、樹の下や石の上のように、これ(一石一字経)を

とどめるところ、神聖なものが守ってくれるだろう。すぐれた

医者で姓は佐田、名は道俟、字は致恭あきまという人は自ら正山隱士

と号し、又は栽松堂と号して、これ(一石一字経)をこつこつと

作り上げ、その素朴で人情にあつく、誠実な人柄はこの里の人

の知るところである。私はそこで次のような詩を作って、言う。

高くそびえる南山、民衆は共に仰ぎ見る。めでたい

しるしである光がこたえ、妙典(法華経の別称)がこのようにし

ずめ、おだやかにする。はかりしれない時間は朽ちることなく、

幸福と利益りやくは限りがない。経塚は縁起のよい名である。名前と

実質がともによい機会にめぐりあい、栄える。

時は寛保二年(一七四二)、年まわりは壬戌みづのえいぬ夏六月

天台宗の僧侶、妙空みょうくうえかい慧海(＝獅子吼堂主人、叟和南)が

「碑の文章を」記すと伝える。

宝暦十年(一七六〇)庚辰かのえたつ秋八月

勢州(伊勢国)洞津(安濃津)藩の家臣、森其章あさな琢卿(其章の字)が拝んで「碑文の文字を」書く。